

文化・芸術

「都会」

1938年12月、鉛筆、墨、木炭・紙
37・2cm×28・2cm
(個人蔵)

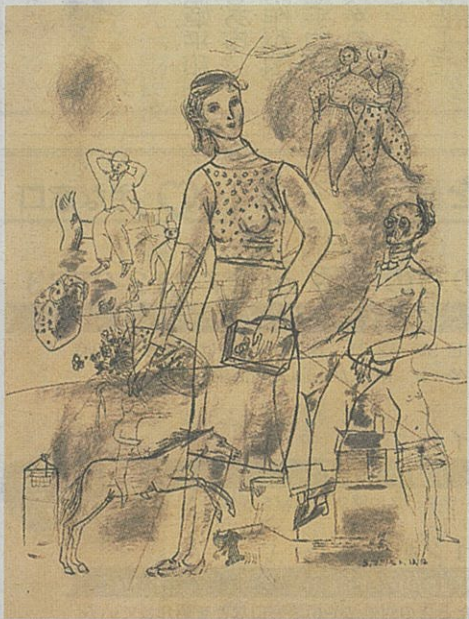
松本竣介 (1912~48年)

「すべての画家は自然に対して受動的であった。それを逆に行く事が今日の芸術である」

松本竣介が1936年に書いた文章の一節です。同年2月に禎子と結婚し、ふたりでデッサンとエッセーの月刊誌「雑記帳」を始めた時期の言葉です。生活と制作が密接に結びつき始めたこの時期の感覚は、38年に描かれた本作にも通じています。

この頃の都会風景には、画面中央に女性像が繰り返し描かれます。竣介は「原っぱを歩く気持で街を歩く」と語り、都会をもまた、一つの自然として見つめています。

禎子との出会いによって、女性を個人的な存在にとどめず、自然と街をつなぐ普遍的な像として捉える視線が、はっきりと形をとり始めていたのかもしれない。(小此木)



《名画の扉》

大川美術館特集展示「松本竣介
一人のかたち、街のすがた」から